公開講座2021報告

2006年に「公開輪読会」として始まった本講座は、当センター研究員の学びを公開し、聴講者の方々と共有する場として開設された。私たちが生きる現代との接点を探りつつ、釈尊、親鸞、清沢満之も含み、広く仏教について課題としてきた。

本年度は、先年に引き続き、オンラインでの開催となった。昨今のコロナウイルス感染症の状況ゆえである。研究員のみならず、聴講者の方々も、オンラインでの学びということに（どこか物足りなさを感じておられるかもしれないが）随分と慣れてきた感があった。

今年もまた、先年と同様に講座全体の共通テーマを掲げていない。しかし、各講座のタイトルを見ていただければわかるように、「読む」ということを意識した。ひとまず読むことを意味する「素読」は、数多（あまた）の情報が消費されていく現代において、特に重要となっているのではないか。

『大乗涅槃経』、「正信念仏偈」、『精神界』――それぞれの時代に探究されてきた真実がある。遺（のこ）されてきた言葉を、目で、耳で、あるいは口に出して、各々の身において読むということを心がけた。

全国からの参集があり、各回おおよそ30人から50人ほどの参加があった。各回の質疑応答の時間には、様々な視角から活発な議論がおこなわれた。

『大乗涅槃経』を読む
― 仏性とは何か ―

親鸞仏教センター研究員　藤村 潔

昨年に引き続き、『大乗涅槃経』（以下、『涅槃経』）を課題として取り扱った。『涅槃経』には主に六巻本、四十巻本（北本）、三十六巻（南本）が現存するが、本年度もまた、中国・朝鮮半島・日本で広く流伝した南本をテキストとした。

中期大乗経典に位置づけられる本経には、主要概念として、「大般涅槃」「如来常住」「常楽我浄」「仏性」「一闡提」といった概念が説示される。こうした主要概念の吟味も射程に入れつつ、本講座では「仏性とは何か」というサブタイトルを掲げ、『涅槃経』で説かれる仏性をめぐる思想的意義を究明した。

『涅槃経』では、様々な物語や譬喩（ひゆ）から仏性の意味内容を明かそうとしている。本講座では、「貧女宝蔵の譬喩」「乳酪五味の譬喩」などを取り挙げて、衆生における「悉有仏性」という課題に迫った。その中でフロアの関心を集めたものが、そもそも仏性とは衆生に内在するものなのか、あるいは外在的なものとして捉えるべきかといった点であった。この点、経典全体（初分・中分・後分）の文脈から考慮するべきであるために、性急に答えは出せなかったが、東アジア仏教の思想家がどのように歴史的に『涅槃経』を受容していたのかを手掛かりに、「性」という観点に注目して考察した。

さらにまた、親鸞が『教行信証』「信巻」や和讃などの中で取り挙げる「信心はすなわち仏性なり」と説かれる「信心仏性」という概念についても注目した。親鸞にとって仏性とは、単に衆生の内在的な「本有仏性」ではなく、如来の願心より発起する信心に拠（よ）るものであるため、はたして『涅槃経』そのものの教説の意図に沿うものか判然としなかった部分がある。とはいえ、やはり親鸞にとって仏性とは、あくまで信心において実現されるものであり、如来より与えられる信心の上において顕現するものと推察される。この点、本講座を通して『涅槃経』の教説を受容した親鸞の仏性理解について改めて問い返すことができたと思う。

「正信念仏偈」を読む
― 依経段における自覚と救済 ―

親鸞仏教センター研究員　東 真行

親鸞の主著『顕浄土真実教行証文類』中「行巻」末尾にある「正信念仏偈」（以下、「正信偈」）は、親鸞を宗祖と仰ぐ人々に重んじられる偈文である。その前半部が所謂「依経段」である。今回はその冒頭の三句を主として、「自覚」と「救済」という切り口から考察を試みた。

「自覚」という言葉を親鸞は用いない。たとえば『歎異抄』に「如来よりたまわりたる信心」（東本願寺出版『真宗聖典』〔以下、聖典〕、639頁）とあるように自ら覚（さと）るのではなく、如来回向によって信心を賜るという。しかし、如来の回向に依ることは、自らを凡夫と知って成立する。ここに「自覚」と表し得る内実があり、同時に「苦悩の群萌」の「救済」（聖典、149頁）がある。

親鸞の生涯では聖徳太子・法然という、観音・勢至の示現でもある諸如来との値遇は重要である。その値遇を経て、のちに親鸞と名のる者が誕生したとも表し得る。その親鸞は、消息を確認する限り、聖覚や隆寛の著作、また、それらについての自らの注釈書『唯信鈔文意』、『一念多念文意』等を門弟に繰り返し書き送っている。親鸞在世時には、これらの「文意」が代表的著作であったのだろう。そこでは「一如法海」あるいは「法身」から法蔵菩薩があらわれたと共通して記される（聖典、543、554頁参照）。すなわち、異なる著作に等しい内容が説かれており、極めて重要な箇所である。

また、その内容は「正信偈」冒頭の三句を読む際の示唆に富む。初めの二句は、阿弥陀仏への帰敬である。続く第三句は、因位の法蔵菩薩のあらわれを讃嘆する。初めの二句から第三句への流れを了祥などの先学は「浄土和讃」（大経意）の第五首、第六首（聖典、483頁）を参照して読み解く。冒頭の三句では阿弥陀仏が果位に留まらず、法蔵菩薩としてあらわれることが讃嘆されているのだと。この了解は「文意」の内容と近似する。つまり、如来が凡夫のために身をあらわすことへの歓喜を、「正信偈」冒頭三句の文脈から読み得るのである。

凡夫の「自覚」に如来のあらわれという「救済」が回施される。如来との値遇に始まる親鸞の実感が「依経段」の根幹にあるのではないだろうか。

『精神界』を読む
― 語られる清沢満之 ―

親鸞仏教センター研究員　谷釜 智洋

『精神界』は、清沢満之と弟子らの対話により育まれた「精神主義」運動が展開されたことで広く知られている。当雑誌は月刊誌として、1901年１月から1919年２月までの約18年間発行されたが、後見人を務めた清沢が1903年６月６日に生涯を閉じたため、雑誌には約２年半しか関わっておらず、残りの約15年間は彼の薫陶をうけた弟子らに継承された。清沢没後も『精神界』には、「精神主義」が弟子たちにより、師匠たる「清沢満之」への心象とともに語られていく。

そこで本講座では、従来あまり顧みられてこなかった1910年代の『精神界』誌上から清沢がいかに語られているか、これを確かめていくことを目指した。実際には第１回から第３回にかけて徐々に1910年代の誌上に迫っていくような形で進行した。講座では『精神界』全213冊のうち清沢への追憶が特に顕著にあらわれている1909年の「清沢先生七周忌記念」並びに1915年の「清沢先生十三回忌記念号」という特集号を確かめていくことにした。

初回は、全３回の手引きとして、まず『精神界』発行の経緯や雑誌の基本的な構成を確認していくことからはじめた。そのうえで『精神界』に報じられた清沢一周忌並びに三周忌の記事から彼の人柄が垣間みえる逸話について紹介した。第２回・第３回では前述した『精神界』の「清沢先生七周忌記念」と「清沢先生十三回忌記念号」といった特集号を確認した。これら特集のうち「清沢先生七周忌記念」には、会場を代えながら三日間にわたる記念講演の内容が掲載されている。また、十三回忌の特集「清沢先生十三周忌記念号」には生前の清沢とほとんど面識のない者からの彼に関する言説も掲載された。

従来『精神界』を読む場合、清沢のものとされる論稿やある特定の論稿への着目が多かったようにみうけられる。しかし、今回の公開講座を通じて「語られる清沢満之」という雑誌『精神界』の一側面を紹介することができたと考えている。